



電通報 2015.10.19 | 05

## 「届く表現」の舞台裏

各界の「成功している表現活動の推進者」にフォーカスする。

### Nerhol(ネルホル)

田中義久と飯田竜太の二人からなるアーティストユニット。2007年から活動を開始。現代の経済活動が生み出し続ける消費と生成、忘却という巨大なサイクルの急所を突くような作品を制作している。

#### 田中義久氏 たなかよしひさ(写真左)

1980年生まれ。2004年武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科卒業後、グラフィックデザイナーとして活動。

#### 飯田竜太氏 いいだりゅうた(写真右)

1981年生まれ。2004年日本大学芸術学部美術学科彫刻コース卒業。14年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修士課程修了。日本大学芸術学部美術学科専任講師。

アーティストユニット・ネルホルに聞く

## デザインと芸術の融合をどのように進行させているのか

田中:グラフィックデザイナーの僕が飯田の彫刻作品を見て、彫刻家なのになぜこれほど視覚的な要素を持っているのか飯田に聞きに行ったのがネルホルの始まりです。会ってみると想像以上に話が広がった。僕にはデザイナーとしての、飯田には芸術家としての全く違う考え方があったけれど、共通部分だけを抜粋して、二人の考えを一つの形にまとめたら一体どういものが生まれるんだろう、二人で作品を作ってみようか、と発展していったんです。ちなみにユニット名は、アイデアを練る(ネル)田中と彫る(ホル)飯田なのでネルホル。2007年、ユニットとしての最初の作品を展示したところ、デザイン業界の人たちからは「これはデザインじゃない」、アート業界の人からは「これはアートじゃない」と言われた。僕らは、お互いのいい部分を含めたら面白い作品になるんじゃないかと、ただそれだけだったのに、デザインでもアートでもないものになってしまった。このままじゃ意味がないと思い、そこから約4年間、デザインとは何か、アートとは何なのかを検証し、ひたすら作品を作り続け試行錯誤を繰り返した。そうした検証の結果を全部結び付けて、ようやく到達したのが12年に初めて展示した「顔」のシリーズなんです。

飯田:3分間写真を撮り続けるという時間軸を使うことで、その人の固有の何かをおさめようとするポートレートです。積み上げた200枚の写真を、僕がカメラでさまざまな角度から撮影し、田中が全体の見え方を

視覚的にコントロールする、という役割分担です。今まで100人以上の写真を撮ってるけど、3分間の人の動きや揺らぎはバラバラ。モデルのオリジナルな動きをアーカイブしたポートレートですね。

田中:この作品群が、ものの見事にいい方向で勝手に解釈されていった。デザイン関係の人はデザインの目線で、美術関係の人は美術の目線で面白いという



「Scene to know / daily No.008'2013」  
 ©Nerhol Courtesy of YKG Gallery

状況になりました。デザインも美術もそれぞれのカテゴリーには、歴史が作り上げてきた独自の文脈があって、それらをクリアできていないと評価対象にならないし、それと同様に、人が芸術とかアートを見るときは、自分の経験知やバックボーンからしか判断できないと思います。僕らはやはり多くの人に伝えたいので、平面、ドローイング、彫刻、写真、パフォーマンスといろいろな解釈が全てできるようにしてあるんです。4年間の検証の中で出来上がったものかもしれないですね。

飯田:そこに至った要素として重要なものは、僕は「強度」だと思っています。作品としての強度があればジャンル

を置き換えても多くの人に伝わらと思うんです。新作の「01」シリーズ(上の写真を参照)の場合は、インターネットが普及している状況をベースにしています。ある1日をも一つのタームにして、その日24時間以内にインターネットに上がった画像だけをプリントアウトして1枚1枚重ね、そこにインターネットの2進法の数字、0と1を彫り込んでいきました。ある特定の日に上がった画像全ての考え方を、0と1という一番元になっているものに形作るという作品になっています。僕は世界の人たちを触発したい気持ちがあります。木や紙を素材にして細かい手を加えていくような作業を、西洋の人たちはあまりやりません。日本や中国には仏師の文化もあって、刀一本一本で面をしっかりと出していくオリジナルの手法がある。日本の中には、こうした独自の価値を持つものがまだ残っていて、絶対「勝てる」部分があるんですよ。

田中:今後の活動の舞台としては、日本と海外という区分の発想もありません。呼ばれればどんどん海外にも出て行きます。より多くの人に伝えられるなら、その方がいいので。これからの僕らにとって重要なのは、自分たちが本当に何をしたいかということ。とにかく作品に向かっていけばいいと思っています。



ナムスワダムの美術展 Pnam TCO展示(2015年5、6月)  
 Pnam Shing Chai. Courtesy of YKG Gallery